

## 英語史研究会第 33 回大会 発表要旨

### ○研究発表

#### 1. 藤原郁弥 (慶應義塾大学大学院生)

##### 古英語の強変化動詞過去複数形においてロタシズムが生じない場合に関する考察

ゲルマン語の強変化動詞過去複数形および過去分詞形ではヴェルナーの法則による摩擦音の有声化が見られるが、これによって生じた PIE \*/s/ > Gmc \*/z/ は古英語においてロタシズムにより /r/ と合一する。しかし、一部の強変化動詞ではこのヴェルナーの法則とロタシズムが見られず、現在形と同様に /s/ を保った形態が文証され、ゲルマン語内部においてもその適用が散発的であることが知られている (田中 2017)。この現象について、先行研究では Prokosch (1939) のように後代における類推の結果だとする説と、田中 (ibidem) のようにゲルマン祖語以前の段階の残滓だとする説の 2 種類が存在している。本発表では、これらの先行研究のうち前者の類推説の方が有効であることを確認した後、このような傾向を示す 3 つの強変化動詞 *rīsan*, *lesan*, *nesan* について、Smirnickyj (1955) によるロタシズムの発達プロセスについての仮説と神山 (2014) によるヨーロッパ諸語に生じた /r/ 音の発達に関する議論をもとに古英語前史において類推が生じた背景について考察する。

#### 2. 高橋佑宜 (神戸市外国語大学)

##### 初期中英語の韻文における OV/VO 語順 : PLAEME のデータ分析から

本発表は初期中英語の韻文における OV/VO 語順の交替に関わる要因を調査する。分析には LAEME (A Linguistic Atlas of Early Middle English, Laing 2013-) の一部を統語解析した PLAEME (A Parsed Linguistic Atlas of Early Middle English; Truswell et al. 2022) から得られたデータを用いる。対象は助動詞 A、原形不定詞 V、目的語 O (人称代名詞・名詞句) の組み合わせからなる語順に限定する (Kroch & Taylor 1997; Trips 2002; Struik & Kemenade 2022)。先行研究 (Struik & Kemenade 2020; Zimmermann 2022) に基づき、OV/VO を応答変数、1) 時代、2) 地域、3) 節の種類、4) 名詞句の種類、5) 名詞句の長さ、6)~8) 助動詞・原形不定詞・目的語への脚韻の有無を説明変数、テキストをランダム効果とした一般化線形混合モデル (GLMM) で解析を行なった。その結果、名詞句の種類や長さよりも脚韻の有無の方がより影響することが示唆された。また、記述的に語順ごとに見ると、名詞が脚韻位置にいる場

合、全体の 94%が AVO 語順、原形不定詞では 53%が AOV 語順、助動詞では 48%が OVA 語順を取ることがわかった。さらに、名詞句の種類や長さが OV/VO 語順に影響を及ぼすという先行研究 (Pintzuk & Taylor 2006 等) を裏付ける結果も得られた。一方で、目的語が名詞句となる語順においては、人称代名詞の場合とは異なり、地域差はあまり見られないことが明らかになった。統計モデリングと記述的分析から、語順の統語的制約や地域差、ジャンルの相互関係に関する議論にも繋げたい。

### 3. 木村典政 (広島大学大学院生)

#### *The Canterbury Tales* に見られる認識表現について

本研究発表は、中期英語の作品に広く見られる、「確かに」「本当のことを言えば」など、命題に対する真偽性を表す認識表現 *epistemic expressions* (*certainly, soothly, truly* などの副詞、*out of dread, without doubt* などの前置詞句、*(as) I guess* などの *comment clause*、さらに *sooth to say* などの独立不定詞) について、*The Canterbury Tales (CT)* に焦点をあて、その特徴について考察することを目的としている。これらの表現については、これまで多くの研究が行われてきた。代表的な先行研究としては、*CT* や *Troilus and Criseyde* に見られる *(as) I guess, (as) I trowe, I woot* などの *comment clause* に焦点を当てたものとして Brinton (1996, 2017)、*soothly* や *truly* などの副詞に焦点を当てたものとして中尾(2011)、*sooth to say* などの独立不定詞に焦点を当てたものとして大野(2015)などが挙げられる。今回の発表では、これらの先行研究を踏まえ、*sooth* を含む表現について作詩法及び、統語論、そして語用論的な観点から分析を行う。さらに、これらの表現が作品の中でどのような役割を果たしているか、ということについて考察したい。

### 4. 寺澤志帆 (慶應義塾大学大学院生)

#### *ad-*における語源参照綴字と語源連想綴字

##### —語源的綴字の初出時期の比較—

*doubt* に含まれる <b> や *adventure* の <d> のように、ラテン語からフランス語を経由して英語に借用された語の綴字を、ラテン語の綴字を参照して直したものを一般に語源的綴字と呼ぶ。しかし、*advance* の <d> のように語源であるラテン語の綴字と一致しない綴字や、*island* の <s> のようにラテン語が語源でない綴字の変化も存在する。本研究では、語源的綴字の下

位分類として、ラテン語を参照して変化したものを「語源参照綴字」、ラテン語と直接の関係がないものを「語源連想綴字」と呼び分けることとする。

一般に語源的綴字は16世紀の現象とされ、ルネサンスと結びつけて考えられるが、Miller (2012)やHotta (2015)など14、15世紀に語源的綴字が存在したことを指摘する先行研究も複数存在する。本研究では、接頭辞 *ad-*に関わる語源参照綴字と語源連想綴字の初出年代の比較を行い、2種類の語源的綴字の発生時期から英語における語源的綴字の受容の過程について考察する。また、ラテン語に一致しない語源連想綴字の英語綴字体系における意義についても考察を加える。

## 5. 佐々木朱美 (大分大学)

### Dorothy Osborne の手紙における独立不定詞

不定詞の用法の一つに、一般に「独立不定詞」と呼ばれる用法がある。不定詞が文全体を修飾し、話し手/書き手の意図や判断、態度を表す慣用表現として、現代英語においては、ほぼイディオムとして定着している用法だが、その構造や機能に関する英語史的観点からの考察はまだ十分になされていない。そこで、本発表では、1652年から1654年に書かれた Dorothy Osborne の手紙から言語資料を収集し、形態やコロケーション、出現位置などの統語的観点から分析を行うことによって、その特徴の一端を明らかにする。また、個々の用例を文脈との関連において考察し、独立不定詞が文脈の中で果たす役割についても検討したい。

## 6. 林智昭 (名桜大学)

### 動詞派生前置詞 *according to* の共時的用法と文法化

これまで、動詞に由来する *concerning, considering, following, regarding* 等の「動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)」は、文法化 (grammaticalization) の好例として研究が行われてきた (Kortmann and König 1992, Fukaya 1997, 秋元 2014)。これらの前置詞の通時的発達は、初期近代英語以降に増大した文書によるコミュニケーションにおける必要性が要因とされている (Görlach 1991)。中でも、中英語期におけるフランス語からの借用語である *according to* の前置詞化は、宗教・科学・法定文書で生み出された諸概念の関係を正確かつ明瞭に表現する必要があったことに起因すると推測されている (Rissanen 2000)。

一方、動詞派生前置詞は、共時的には「書き言葉」に生起する傾向を持つ。例えば、林 (2020) は、British National Corpus (BNC) から抽出した文頭に生起する動詞派生前置詞 *considering, excluding, saving, barring* が書き言葉で使用される傾向を持つと分析している。それに対して、関係詞 *which* に随伴する動詞派生前置詞の生起ジャンルを Corpus of Contemporary American English (COCA) で調べた林 (2020) によると、*according to* は、主に書き言葉で使用される傾向を持つが、頻度の高い *during* とともに「話し言葉」においても使用されることが特徴であることが明らかになっている。このことは、*according to* の使用が、書き言葉から話し言葉へと拡張していることを示唆する。

本発表では、上記のような先行研究の記述に基づき、*according to* の共時的な分布をより詳細に記述する。さらには、通時的变化の軌跡が共時的な意味構造に反映されていることを文法化の観点から考察する。

## 7. 大橋浩 (九州大学)

### トピックシフトを表す *But I digress.* について

現代英語の *But I digress.* は「それはさておき」や「話をもどそう」というトピックシフトの意味で使われる。「話が逸れてしまった」という意味から「なので話を戻そう」という語用論的推意が生じ、その推意が定着したという説明が可能であるように思われるが、現代英語を見る限りでは動詞の時制と意味にミスマッチが見られる。本発表では、Early English Books Online (EEBO) などからの用例によって、この表現の使用が確認される 17 世紀において現在形が表していた意味に現代英語ではミスマッチと見ることが由来することを示したい。また、この表現について、構文化、逆接表現からトピックシフトへの意味拡張という観点からも考察したい。